

各課の取り組み

基幹センター 企画課

企画課の取り組み

基幹センター 企画課
精神保健福祉士 木村 裕之

1. はじめに

基幹センター企画課では、平成 24 年度に引き続き、普及啓発・人材育成を中心とした事業、外部機関との交渉、活動の統計処理などを中心に活動を行ってきた。

活動を行うにあたって、時間の経過とともに変化していく被災地の問題の把握と、どのような取り組みが被災者、支援者の力となるのかというニーズの把握に苦心した。企画課員は現地に足を運ぶ機会も少ないため、各地域支援課との連携を意識し活動した。

活動の結果、本センターの周知も進み、講演をはじめとした様々な依頼も増加している。ここでは平成 25 年度の活動を振り返りつつ、平成 26 年の活動について述べていく。

2. スタッフ構成

4 月に事務職 1 名の入れ替え、平成 25 年 7 月と平成 26 年 1 月に精神保健福祉士 2 名が加わり、課員は 9 名となった。

精神保健福祉士 6 名（内 1 名は医療機関からの出向）

保健師 1 名（県からの駐在）

事務職 2 名（内 1 名は派遣職員）

3. 平成 25 年度活動状況

(1) 普及啓発

① 各種パンフレットの作成、配布

平成 24 年度に作成したパンフレットを継続して配布した。アルコールに関するパンフレット『飲酒により起こる症状や病気』は、予定部数より需要が多く、増刷した。平成 25 年は認知症についてのパンフレットを作成し、現在計 10 種類を配布している。作成に当たってはセンター外部の専門家の意見も伺い、理解しやすい内容となるよう心掛けた。パンフレットに対しての周知が進み、関係機関からの追加要望やパンフレットがきっかけで相談につながるケースも増加している。

（平成 25 年度作成の普及パンフレット一覧は、5 頁『平成 25 年度 事業項目別活動状況』参照。）

② 広報誌の作成

本センターの活動を広く周知するために、一般の方や支援者を対象とした広報誌の作成・配布を継続して行った。本センターの活動だけではなく、他機関の活動の紹介

など、地域の連携を意識した紙面とした。

配布先についても、できるだけ多くの方の目に留まるよう、送付先を増やす取り組みを続けている。

③ ホームページの運営

本センター主催の研修や、他団体のイベントなどを中心に 35 回更新。発行している広報誌やパンフレットも掲載し、メンタルヘルス全般の情報を広く一般に周知した。現在、一日平均 50 件のアクセスがある。

④ 新聞、TV等の取材への対応

企画課は本センターに寄せられる新聞、TV・ラジオ等各種取材の対応及びコーディネートを行った。

(2) 地域住民支援

① 被災地の親子を対象としたデイキャンプの実施

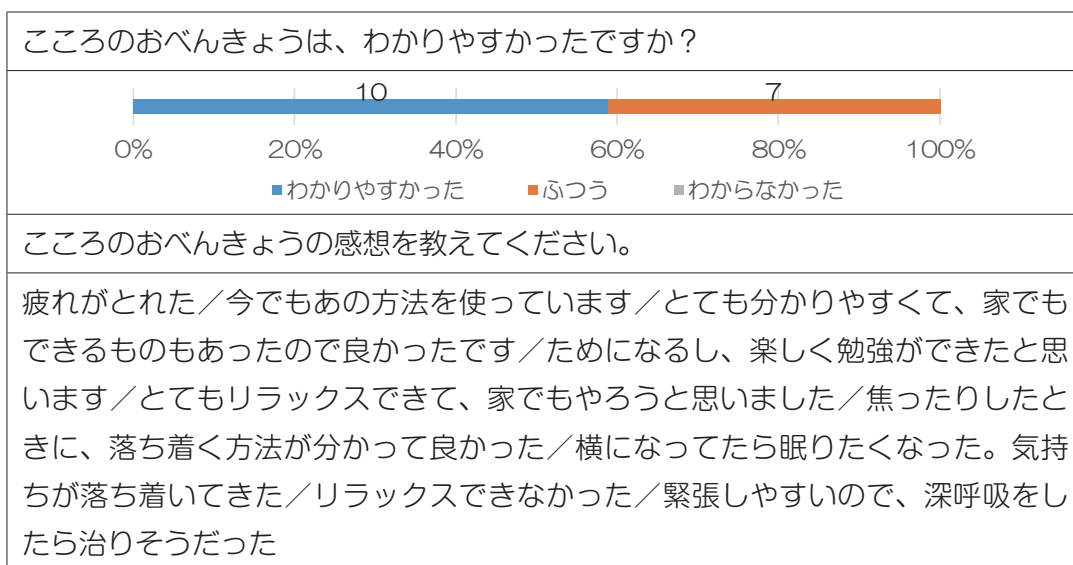
(実施目的は 7 頁『平成 25 年度 事業項目別活動状況』参照)

平成 24 年度に引き続いての開催となり、企画課 3 名も主担当となった。震災時、沿岸部に居住していた親子を対象として実施し、子どものプログラムには 26 名参加した。同時に開催した保護者対象のサロンには 3 名の参加があった。

子どものプログラムではカレー作り、段ボール遊びや宝探しといったレクリエーションと、『こころのおべんきょう』と題して心理教育を実施した。アンケートでは参加した子ども全員から「楽しかった」との回答があった。

保護者プログラムでは、ヨーガやアロマを取り入れたセルフケアプログラムを実施した。

< デイキャンプアンケート結果① 子ども (一部抜粋) >



そのほかに、今回参加してみての感想など、ご自由にお書きください。
クリスマスとかイベントを増やしてほしい／今年は宝探しをして、とても楽しかったので、また来年も行きたいです／自分達で作った料理、みんなで遊んだり、勉強したりしてとても楽しかったです／みんなで作ったカレーがおいしくて、いっぱいおかわりをした。焼きマッシュマロも焼きいももでっかくておいしかった。お姉さんといっぱい遊んで楽しかった／友達がいっぱいできたので、うれしかったです。
保護者様にお聞きします。お子様を参加させてみてのご感想がございましたら教えてください。
朝早い時間～夕方まで丸一日親と離れ、知らない場所・お友達と過ごすという体験が初めてで、本人も大分緊張していたようですが、帰ってきたとたん「来年も行く」と自分から言い出し、親はびっくり！！楽しい経験とスタッフの皆様のお蔭で一回り大きく成長した我が子に感動です／今現在学校も間借り、学年児童も10～20くらいで学校生活をしていますので、狭い世界になりがちなので多くの事を経験させて世界を広げたい／疲れて帰ってきたが、とても子供が成長したように感じた。スタッフの方は優しく接してくれ、嬉しかった。また来年教えてください／親にはなかなか出来ない事をしていただいて感謝しています／行きたくないと泣き出したので心配しましたが、とても楽しい経験をしたようで安心しました。ありがとうございました。次回も是非参加したいそうです／初めて会う子や人の中でも、自分の思いを伝え楽しく参加しているようで、今後もこのような活動があれば参加させたい。怖がりという点についてもまだ心配であるが、少しずつ自分の自信と共に減ってきているように感じる／おなかも心も満たされて楽しいキャンプだったようでした。ありがとうございました。その日の夜、布団に横になったときに、こころのおべんきょうの話をしてくれました。一緒に手を合わせて呼吸を試してみました。落ち着きますね

<デイキャンプアンケート結果② 保護者（一部抜粋）>

自分なりにリラックスできる方法を見つけることが出来ましたか。
ヨガは一人でも出来るので、家で時間がある時にチャレンジしてみたいと思いました。アロマは一人では難しいので、また、機会があったらしてもらいたいと思います／寝る前に軽いヨガとかいいと思いました。
今回の体験は、今後の生活の場面でも活かしていけそうですか。
普段ストレスがたまりがちなので、ヨガでリフレッシュしていけたら良いなと思います。

(3) 人材育成・研修

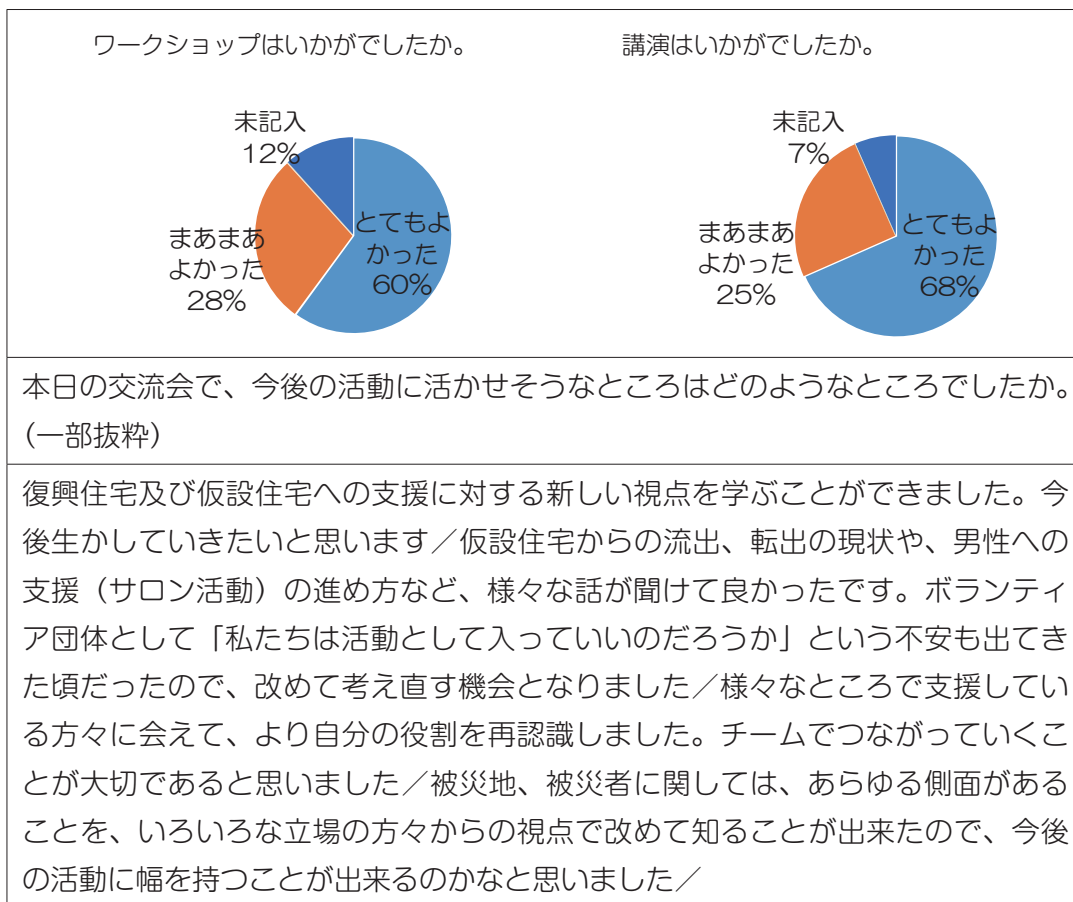
① 震災心のケア交流会みやぎの実施

『震災心のケア交流会みやぎ（以下『交流会』という。）』は、震災後、『震災こころのケア・ネットワークみやぎ』が主催し、第2回より本センターとの共催となっている。平成25年度は気仙沼市、石巻市、仙台市で行われ、企画課は第7回交流会（仙台市）開催分を担当した。

当初、交流会は発災後から休みなく業務に従事されてきた支援者に、一時でも現場を離れてリフレッシュできる時間を持っていただくこと、各地から参加した担当者同士の交流、情報交換を目的として企画された。第7回交流会では、これまでの目的を踏襲しつつ、『支援の縁を円く』と題し、災害公営住宅への転居等、被災者を取り巻く状況が大きく変わること、起こりうる問題に対応するためには関係機関の連携が必要不可欠であるというメッセージを明確にし、企画・実施した。

県内の支援者を中心に50団体・部署81名とこれまでで最も多い参加者数となった。ワークショップと講演の2部構成で実施し、アンケートではほとんどの参加者が「とてもよかった」「まあまあよかった」と回答した。

<第7回 震災心のケア交流会みやぎアンケート結果>



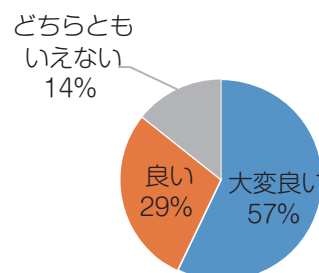
震災3年目が様々な問題がでてくる時期ということで、今後もきめ細やかな支援の必要性を感じました／これまでも大変でしたが、これからの活動がポイントなのだと思います。心のケアと、街づくりということも密接な関係があることも学びました

交流会で印象に残ったことや、ご感想・ご意見・ご要望がありましたら、自由にお書き下さい。(一部抜粋)

心のケアの関係者同士がつながることで、大きな被災者支援ができるのではないかと感じました。／このように支援者の交流を目的とした会は少ないように思われるので、貴重な機会となりました／様々な立場の方とお話することができ、改めて復興の支援はみんなで作るものだと思った／被災者の支援にこんなにたくさんの方が関わっていることに驚きました。これからさらに格差が出てくるだろうけれど、誰かとつながっていることが、孤立していくことを防いだりするので、行政だけではなく、いろいろな人に支えてもらうことが大事なんだと改めて思いました／色々な地域で色々な業種の方が自分たちにできる支援を忍耐強く続けて下さっていることに勇気と元気をもらえました／長く続く支援を続けていくには、支援側の支援の不可欠さも改めて感じました／支援者側の心のケアで何が大切か、気をつける点は何かを知りたかった。お2人とも活動したことの話が主だったので、専門的な話がききたかった／戸別訪問をして会えなくてもメッセージを残すことで会えたというケースはとても参考になりました。私も戸別訪問を実施しているため、実践してみたいです／他の団体も似たような問題を共有しており、勉強になった／活動の現状を知ることができて、有意義な時間をすごせました。これから自分が何ができるかを考えていくヒントにしたいと思います。

② メディアカンファレンス

自死等、メンタルヘルスの問題が生じた場合の報道とメンタルヘルス専門職の連携のあり方、相互理解を深めるための研修を(独)国立精神・神経医療研究センターと共催で行った。参加者は36名で、メディアの参加は4社6名だった。



内容についての感想

③ 沿岸部精神科医療機関を

<メディアカンファレンスアンケート結果>

対象としたアルコール研修

震災後、問題が表面化することが多くなったアルコール問題に対応するため、専門病院である東北会病院での研修(事業委託)を沿岸部の精神科病院、クリニックのス

スタッフを対象として実施した。計6名の参加者があった。

④ 3県心のケアセンターミーティング

東日本大震災を契機に設立された宮城、福島、岩手の心のケアセンター共同で研修を実施した。情報の共有とセルフケアを目的とし、ヨガなどを行った。来年度以降も継続して実施することとなっている。

⑤ 支援者に対する研修

支援に関わる者を対象に研修を167回行った(前述①～④含む)。内容は、精神疾患・障害に関する研修、傾聴などの支援技術研修や、支援者を含めた職場、子ども、高齢者等へのメンタルヘルス研修、課題となっている自死対策、事例検討を含めた研修などである。

(4) 支援者支援

平成25年度は支援者支援という項目で、企画課で実施した事業はほとんどない。しかしながら、センター内部及び外部機関との環境調整等には多くの時間を要することとなった。開設2年目を経過し改めてチーム作りの難しさを痛感する年となった。

外部機関については、4団体(東北会病院、宮城県立精神医療センター、日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会、宮城県断酒会)に委託している事業について、委託内容の調整及び事務的な対応全般を行った。

(5) 調査研究

① 統計システム構築

本センター全体の活動実績を明確にすることを目的に、平成24年4月より開発中であった統計システムの運用を開始した。これにより活動データの集約・分析が簡便となった。

今後は(独)国立精神・神経医療研究センターで開発している災害精神保健医療情報支援システム(DMH I S S)との連携を行う予定で、これにより厚生労働省への報告が自動となり、より円滑な報告がなされるようになる。

(6) 各種活動支援

自治体や保健所、当事者団体等県内で活動している団体と連携し、その活動を支援することを目的とした事業を行った。平成25年度は、仙台グリーンケア研究会やAAおじかグループ、日本精神科看護技術協会宮城県支部等が主催するイベントに対して開催支援等を行った。

(7) 職員研修

① 定例研修

本センター職員を対象とした研修を開設当初より月1回実施していた。これはスキルアップや情報共有だけでなく、業務についての振り返りや職員のメンタルヘルスの維持なども目的としていた。

しかしながら現場での活動が増える中で、職員が集まることが困難となり、平成25年度は隔月で実施することとなった。またこれまで仙台で行ってきたが、より現場の状況を知るため石巻地域センターと気仙沼地域センターでも各1回ずつ実施した。

② 専門性を維持・向上するための研修体制

職員が現場のニーズに即して、より専門的な知識が得られるように東北会病院や東北大学寄附講座での研修を必須とするほか、その他専門機関が実施している研修の参加調整を行った。

(8) その他

① サポーターズクラブの運営

サポーターズクラブは、本センター設立当初に現場の膨大なニーズに対応するためにはセンター職員だけでは困難との見解から立ち上げるに至った、有資格者を中心とした人材バンクである。平成25年度は前述したデイキャンプの他、民間賃貸借上住宅入居者調査後のフォロー、サロンの運営等に協力いただいた。

② Web会議体制の構築

活動が広まるにつれて検討すべきことも増え、既存の会議だけでは対応困難となっていた。活動拠点が離れており、頻繁に会議を行うことは難しいため、Web会議システムを導入した。

③ 日本病院・地域精神医学会

平成26年10月31日(金)～11月1日(土)に仙台市内で開催される日本病院・地域精神医学会について企画課員3名が事務局員として参加することとなった。

4. 平成26年度の計画

平成26年度の事業計画は以下のとおりであり、企画課内の業務内容を見直し、企画調整部(企画課・調整課)を開設して実施する予定である。

(1) 普及啓発

広報誌やホームページはこれまでの取り組みを継続する。必要に応じてこれまでのパンフレットの増刷を行うほか、日常生活の中にメンタルヘルスを取り入れてもらえるように『スト

<広報誌発行予定>

年4回(6, 9, 12, 3月)

<パンフレット作成予定>

ストレス・リラクゼーションについて

学校関係者に対する子どもの理解と心のケア

レスについて』『リラクゼーション』等のテーマについても作成する。

一般を対象とした研修についてもメンタルヘルス全般の基礎知識やセルフケアなどについて、地域の実情に応じて実施する。

(2) 地域住民支援

被災地の親子を対象としたデイキャンプを平成 26 年度も実施する。平成 25 年度までのアンケートや、地域住民の声を参考に企画立案を行う。10 月頃開催を予定している。

(3) 人材育成・研修

震災心のケア交流会、メディアカンファレンス、3 県心のケアセンターミーティングは継続して実施する。東北会病院委託事業となっているアルコール研修は、アルコール問題についての対応ができる地域づくりを目指し、より効果的な研修となるよう、受講対象やプログラムの内容を検討していく。その他、支援者に対する研修は地域の実情に応じて実施する。

(4) 支援者支援

平成 26 年度も、外部機関との委託事業について企画課は円滑な活動が実施できるようサポートを行うとともに、中長期的な視点から事業内容について検討を行う。

(5) 調査・研究

統計システムについては適切な運用がなされるように、定期的に職員に対しての研修を実施する。統計システムで得られたデータを基に自治体ごとの比較など、今後の地域精神保健に有益な調査・研究を行う。

(6) 各種活動支援

平成 26 年度も、自治体や保健所、各種活動支援、当事者団体等県内で活動している団体と連携し、その活動に協力していく。

(7) 職員研修

定例研修は、平成 25 年度同様に隔月を目安に開催する。開催内容については職員からの要望を取り入れ、より現場のニーズに則したものを企画していく。

また、活動の振り返りと、各地域センター同士の情報共有、職員のメンタルヘルスの維持などに努める。

(8) その他

サポーターズクラブについては、現在も地域では慢性的なマンパワー不足があるため、登録者の増員とより活用しやすい体制の整備が今後の課題である。登録者を現在の倍となる 10 名まで増やし、即時的に地域の要請に対応できることを目指す。さらに担当部署を明確にし、より活用しやすい体制づくりを構築する。

5. 考察・まとめ

宮城県では災害公営住宅の建設が本格的に始まり、被災者を取り巻く環境がさらに変

化していく時期になってきている。

被災者にとって住環境が整うことは復興への第一歩ではあるが、阪神淡路大震災や、新潟県中越大地震及び中越沖地震で災害公営住宅を建設した際には、仮設住宅で出来上がったコミュニティが無くなってしまふことや入居者の高齢化等が問題となった。住宅などハード面の問題が改善されると、それが復興と捉えられがちである。しかし、今後地域ではさらに新たな課題が起りうることを認識して臨まなければならない。

これまでは地域からの要請に応える形で業務を行ってきた。これは地域が直面している課題への対応として、とても有効であったように思う。今後は地域のニーズに対応しつつも中長期的な視点に立ち、想定される問題に対して我々から積極的に発信していくことも必要となる。

企画課は、地域支援課等と異なり、直接的な住民支援を行う機会が少なく実際的な支援の成果が見えにくい課である。しかし実際の業務内容は、他団体との交渉、打ち合わせ、市町を超えた企画の立案、実施など多岐にわたっている。兵庫、新潟にあるところのケアセンターの経験から我々は学び、本センター職員だけではなく、震災に関する支援者が活動しやすい環境づくりを目指していきたい。また、これからの宮城県 の精神保健業務の底上げも念頭に、限りあるマンパワーではあるが、現在と今後想定される課題に対して、より効果的な対応を十分検討し、実施していきたいと考えている。

6. 終わりに

平成 25 年度も多くの方から支援をいただいた。特に兵庫、新潟両県のところのケアセンターには中長期的な視点に立った多くの示唆をいただき、この場を借りて御礼申し上げたい。日々変化を続ける被災地の問題に対し、活動は常に手探りである。その中で過去の経験を教えていただくことは非常に心強く、我々の大きな心の拠り所となっている。そしてその経験の中に伺える努力には敬服するばかりである。

先輩方の経験をしっかり受け止め、我々は経験を積み重ねる中で災害時及び地域精神保健の歩みを一歩でも前に進められるよう、日々努力を重ねていきたい。